

第 27 回目 おのずと成長する教会

はじめに

●パウロが教会について述べる場合に明確な点があります。前回にそのことをお話ししましたが、下図に見るように、三つの点(「一致・多様性・成長」)です。今回はその中の第三の点の「キリストのからだ」として例えられた「教会の成長」について考えます。キリストご自身のからだである教会は一つですが、からだを建て上げるために、主はご自身のからだにつながる私たちひとりひとりに特別な賜物を与えておられます。からだの背骨に当たる部分にも、「使徒、預言者、伝道者、牧師・教師」といった異なる賜物があります。背骨はからだの中の一部でしかありませんが、からだ全体を構成する重要な部分であることには変わりありません。エペソ人への手紙ではその部分だけが取り上げられていますが、からだがからだとしての機能を持ち、成長していくためには、多くの部分が相互依存という関係によって密接なつながりをもっています。そうした相互依存的関係を有機的な関係とも言います。



●ひとつの受精卵はやがて二つに分裂し、さらに分裂しながら数を増やし、人のからだを構成する細胞の数は 60 兆にも及ぶと言われています。しかもその細胞は常に新しく生まれ変わっているのです。そうした膨大な数の細胞が実に相互的なかわりをもって有機的な一つのからだを形作っているのです。これは人間が作り出せるものではありません。神のみわざです。人間はひとつのロボットを作ることができます。ひとつのロボットは多くの部品から成り立っていますが、それによってできるロボットはすべておなじ形です。しかし、神の造られるものは 60 兆の細胞を用いながら違った顔・形を持ち、異なった性格をもち、体格もみな異なっています。そして、子どもから大人へと成長していきます。からだだけでなく、心も成長していくのです。また、神の造られた者は再生する力を持っています。どこかがけがをしたり、病気になったりしても回復する力を持っています。さらに、人間から人間が生み出されます。人間がそのようなものを作ることは決してできません。そこで、今回はエペソ人への手紙 4 章 12～15 節を読みたいと思います。そこには「達する」とか「大人になる」とか、「キリストの満ち満ちた身たけまで」とか、・・・「成長」を表す用語が多く見られます。

【新改訳改訂第 3 版】エペソ人への手紙 4 章 12～15 節

- 12 それは、聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるためであり、
- 13 ついに、私たちがみな、信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とに達し、完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身たけにまで達するためです。
- 14 それは、私たちがもはや、子どもではなくて、人の悪巧みや、人を欺く悪賢い策略により、教えの風に吹き回されたり、波にもたせられたりすることがなく、
- 15 むしろ、愛をもって真理を語り、あらゆる点において成長し、かしらなるキリストに達することができるためなのです。

## 1. 自然から学ぶ「成長」ということ

●イエシュアは神の世界、神の国の真理について語られたときに、しばしば「自然界にあるもの」をたとえとして使われました。それは「自然から学ぶ」ためです。「自然から学ぶ」ということは、神の創造の神秘から学ぶという意味です。そして神の創造の神秘から学ぶということは、創造者である神から学ぶという意味でもあります。マタイの福音書 6 章 28 節 「野のゆりがどうして育つか、よくわきまえなさい。」 「よくわきまえる」とは、以下のことを意味します。

- ① よく考えてみること。
- ② 注意して観察すること。
- ③ 熱心に学ぶこと。

●「野のゆりがどうして育つか」・・・みなさんは考えたことがありますか。ここでは、花の美しさを見よ、と言われているのではなく、どうして育つか、どうしてこんな美しい花が育つか、表面に見えることだけではなく、見えない部分にも目を留めるよう促しているのではないのでしょうか。野の花の美しさではなく、その成長のメカニズムについて、「よく観察しなさい。研究しなさい。学びなさい。」ということなのです。それは神の国の成長ということをよく理解させるためなのです。それは同時に、今回の「達する」「大人になる」「キリストの満ち満ちた身たけにまで達する」「成長する」ということを正しく理解するためなのです。



●私はかつて、二年間(2006~2008年)でしたが、石山という里山を通して自然に触れました。多くの樹木(高木、中高木、低木、つる性の木本)、そして樹木以上に種類の多い野草、その蜜を吸う昆虫、その昆虫を食べる鳥、林床内のさまざまな生き物たち、キノコの類、また目に見えない土の下にいる多くの生き物たち(ミミズなど)、そして微生物たち、そうした相互依存のかかわりが成立しているすばらしい雑木林(森)を作っています。この石山はかつて 90 年前、一度、多くの木が切り倒されています。しかしその結果、より多くのものが忍び込む機会ともなって、種類の多い樹木、野の花、キノコ、生き物たちがこの中で生きているのです。森全体が成長し続けているのです。このような豊かな森となるために、人為的な手を加えなかったということが重要なのです。

●キリストのからだとしての教会の成長も、実は、同じことが言えるのではないのでしょうか。私たちがなにか人為的な方策によって成長をさせようとするならば、おそらく健全な成長をすることができないような「いのちの神秘」というものが「教会」にはあるということです。

## 2. なぜ人為的方策はうまくいかないのか

## אגרת שאול אל האפסים

●アフリカで、象の数の減少を防ぐために特別保護区を設けました。そのことによって象は保護され、短期間にすばらしい効果をあげ、減少し続けていた象の数が増加に転じました。しばらくの間は何の問題もありませんでした。ところが、群れの数が増えるにつれて、象の食べる食糧が食い尽くされ、象の繁殖がストップしただけでなく、さらにもっと恐ろしいことが起こりました。なんと象がすべて死に絶えてしまったのです。最初の対策は、象を保護するものでした。人間的方策を施すことによってそれは有効であるかのように見えました。しかし長期的には象を絶滅に追いやってしまう結果となったのです。

●象を守るために特別保護区を設置して、結果的には象を追いやってしまったという論理。「保護の結果としての破滅」という論理は、人為的方策というものは、多くの場合、失敗に行きつくことがあるということなのです。なぜなら、限定された状況の中で、限られた時間の枠でしか物事を考えていないからです。これは象だけの問題ではありません。より強い抗生物質があれば健康を保つことができると考えたり、より強い化学肥料を使うことで多くの収穫をもたらすと考えたりすることと同じ論理なのです。むしろ、それは反対の結果をもたらします。こうした人為的方策の危うさは、キリストのからだである「教会の成長」にも言えるということなのです。

●「植物の成長に必要な四つの無機物」は右図の通りです。

①窒素 ②石灰(カルシウム) ③リン酸 ④カリウム

●これら四つのバランスがとれていることで、はじめて、植物は自然に成長します。

〔図①〕四つの必要栄養素のうち、三つが適量投与されても、一つが極端に欠けているならば、植物の成長は妨げられます。この図では特にリン酸が不足しています。窒素も欠乏気味です。

〔図②〕不足していたリン酸が加えられることによって、植物は順調に育ちます。しかしまだ窒素が不足気味なので、成長は遅くなります。

〔図③〕ここで農夫は、リン酸を加えたことで回復した経験をもっているので、さらに前以上にリン酸を加えました。すると土壌は酸性になってしまっていて、かえって有害なものとなり、植物の成長は止まってしまいました。

〔図④〕この農夫はなにが足りないのかを植物をよく観察して見抜く知恵がありませんでした。もし、植物の育ち具合をよく見て、なにが足りないかを知って不足がちのリン酸だけでなく、窒素も補っていたならば、土壌は豊かさを回復して植物の成長も順調に維持されたはずでした。



●このことは、教会の成長を考えると、どう適用できるでしょうか。

一ある教会の隣の教会は急激な成長を遂げていました。ところが自分の教会はそれほど実を結んでいないように思えました。そこで、その教会の牧師は隣の教会の牧師を見て、彼がするのと同じことをしました。また、隣の教会の牧師の善意のアドバイスを受け入れて、それに従おうとしました。ところが状況はますます悪くなって行きました。一見、「成功しているように見える教会」は、リン酸を加えて収穫が増加したようなものです。ですから、すべての解決法として、リン酸を加えたらうまくいくということを勧めたのです。勧められた

方も「そうか、では同じようにやってみよう」としたのです。ところが、逆効果をもたらしてしまいました。—

●もっと伝道しなければならない。伝道できる信徒を訓練しなければならないという牧師もいるでしょうし、うちの教会は祈りが少ない、もっと祈り会を充実させなければならないといって祈り会を強調する教会もあるかもしれません。どこの教会が、これこれの方法で効果をあげているらしいから、うちの教会でも取り入れてやってみよう・・といった具合です。これはこの世のビジネスでも言えるかもしれません。

●今日、世界中から成功している教会の牧師たちが日本にやって来ては、なかなか成長しない日本の教会に、こうすれば成長できるというセミナーをしています。そうしたことが繰り返されていますが、効果のあった教会もあれば、逆効果の教会もあるのです。ある教会で成功した方法が、他の教会でもうまくいくということはないということを知らなければならないのです。あるいは、かつてこの方法でうまくいったという過去の経験を信賴してはならないのです。むしろ、窒素を補足したことで土壌が回復した④の例のように、不足だと感じている面に解決の道があるのかもしれない。

●教会が成長するということは自然界の植物が成長するように、とてもデリケートな、そしていのちの神秘にかかわる神のわざだということを中心に留めたいと思います。成長させるのは神です。ですから、私たちは人為的な方策を講じて、成長させる神の働きを妨げてはならないわけです。むしろ、何もしないで、「空気を読んで」、その流れの中に身をゆだねていく方が良いかもしれないのです。

●イエス・キリストが、「野の花(ゆり)がどのようにして育つのか、わきまえなさい」と言われたことをまとめてみましょう。つまり、それは「植物の成長から学べ」ということです。

- ① 人為的な弱点補強策は成長をもたらさない。
- ② ある成功の経験は譲渡できない。むしろ逆効果をもたらすことがある。

### 3. 神の成長には自動性(オートマティズム)があることを知る

●以下のことばは、(1)がイエシュアの語ったことばであり、(2)が使徒パウロの語ったことばです。

- (1) 「わたしは、わたしの教会を建てます。」(マタイ 16:18)。
- (2) 「大切なのは、植える者でも水を注ぐ者でもありません。成長させてくださる神です。」(Iコリント 3:7)

●自然界の成長には常に「自動性」(オートマティズム)が存在します。キリストのからだである「教会」も同様に、神の「自動性」(オートマティズム)があります。このことを念頭に置きながら、神を恐れつつ、成長させて下さる神のみわざに期待したいと思います。